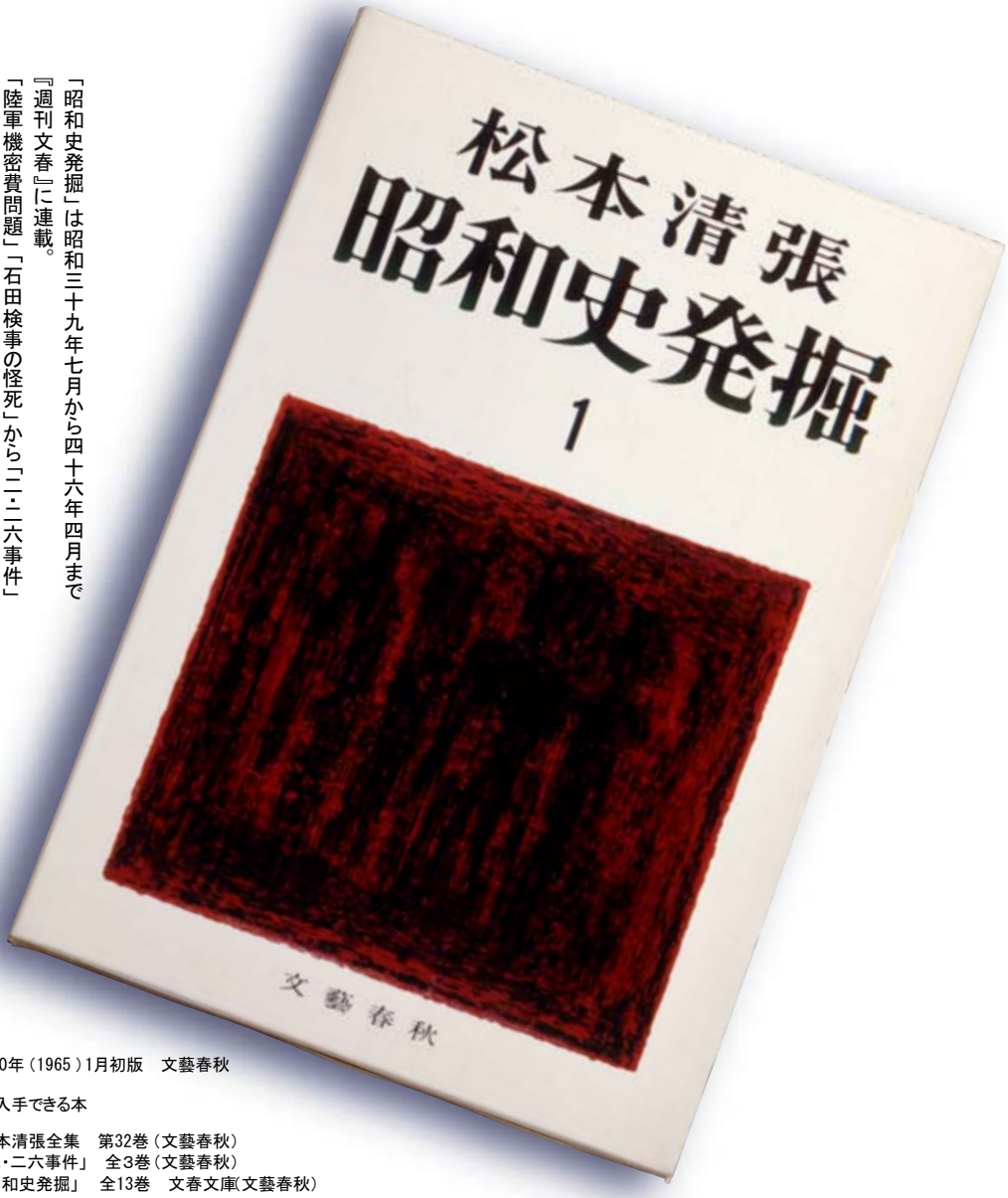
MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

松本清張記念館

◆館報◆
2001. 11
第7号

資料をもって語らせよ。



「昭和史発掘」は昭和三十九年七月から四十六年四月まで『週刊文春』に連載。
「陸軍機密費問題」「石田検事の怪死」から「二・二六事件」まで二十のテーマからなる。

昭和40年（1965）1月初版　文藝春秋

現在入手できる本

松本清張全集　第32巻（文藝春秋）
「二・二六事件」　全3巻（文藝春秋）
「昭和史発掘」　全13巻　文春文庫（文藝春秋）

作品紹介

ノンフィクション「日本の黒い霧」「現代官僚論」で戦後日本の同時代史にせまった清張は、「昭和史発掘」で戦前の昭和史に目を向ける。

昭和初期、田中義一政友会総裁の陸軍機密費をめぐる疑惑をはじめとして、多くの怪事件や重大事件が起こった。清張は、社会に対する「ぼんやりとした不安」という言葉を残して自殺した芥川龍之介の姿なども織りまぜながら、長引く不況が深刻化し、思想・言論への弾圧が強化され、軍国主義が支配していく時代の姿を、七年もの連載期間をかけて丹念に描き出す。

単行本にして全十三冊におよぶ大作の後半部は二・二六事件である。清張は、事件の詳細を見据えると同時に、そこに至るまでの政界・軍部・右翼らの動きなど、ひろく社会全体に筆を向け、その全貌を立体的に浮かび上がらせた。膨大な新資料と証言を駆使し、はじめて宮城占拠計画について暴きだし、非公開で進められた特設軍法会議の全容を解き明かしてみせた。「学者」と「作家」の域を超えた業績は圧巻である。

（学芸担当　小野　芳美）

目次

●開館3周年記念事業……2
●展示品紹介……5
●探検！清張記念館……5
●みんなの広場……6
●北九州文学マップ……6
●お知らせ……7
●記念館入館者四十万人突破……7
●トピックス……8

松本清張記念館

開館3周年記念事業

八月四日、松本清張記念館は開館三周年を迎えました。この三年、常設展示のほか、年二回の企画展などの普及事業や、「松本清張研究奨励事業」の創設、研究誌の発刊などの研究センター事業を展開し、情報発信と研究の促進に努めてきました。おかげさまで全国から多数ご来館いただき、入館者は約四十万人（九月末現在）に達しました。

当日は、三周年を記念して多彩な催しをくり広げました。講演会を開催し、記念館オリジナル映像「点と線」を初公開しました。研究奨励事業も第三回入選者が決定し、講演に先立って奨励金贈呈式を行いました。また、三周年を祝う記念祝賀会も盛大に催しました。

特別企画展も十月末まで開催し、盛況のうちに終了しました。

記念講演会

「松本清張という一大山脈」

会場●北九州市立女性センター ムーブ

作家 森村 誠 氏

講師の森村誠一氏は、自他共に認める清張ファン。この講演のために改めて数えてみると、膨大な清張作品のうち八割は読了していたと。北九州市の俳人、故横山白虹氏に紹介され初めて清張邸を訪ねたときの印象や、氏が江戸川乱歩賞を受賞したときの二度目の出会いなど、興味あるエピソードの紹介から講演は始まりました。

続いて、作家に徹しきるきびしい姿勢、作品に満ちる正義感、あふれる好奇心・探求心、反体制的姿勢、取材力のすごさ、奔放な物語性、現代を反映する記録性、描写に織り込まれた時間軸の巧みさ、生き生きとした人間群像、硬質でありながら官能的な文章、作品が発する人間の臭い、ビーフステーキのような作品を生み続ける体力、などなど、数多くの作品を引用しながら作家・清張とその文学の特徴を熱く語られ

特別企画展

松本清張と風間完 風間 完 挿画・原画展

期間●平成3年8月1日（水）～10月31日（水）

会場●松本清張記念館【2階ホール】

点と線　登場人物対比表

一、松本清張と風間完

名コンビの二人は、三年間連載した「天保図録」、七年近く連載した「昭和史発掘」など、長期にわたり伴走した。二人の接点をふり返り、風間氏の仕事を紹介。

――〈展示品〉風間完　著書・画集

二、昭和史発掘

「昭和史発掘」の長期連載を支えた印象的な挿画の数々。そのばく大な画の中からセレクトした、原画と掲載誌の対応展示により作品世界を紹介。

――〈展示品〉「昭和史発掘」挿画（原画）・掲載誌『週刊文春』

ました。松本清張がいつも心の支えであり勇気を奮い起こす源になっていた、との言葉もありました。

そして最後に「この会場で同じ顔ぶれで同じ時間に会うということはありえない。そういう意味で『一期一会』の出会いです。私の作家デビュー、その作家の姿勢にたえず影響を及ぼし、私の人生の間にどのくらいの小説を読んでいるか（中略）おそらく最大多数を占めている、松本清張の記念館に招かれて、松本清張について語る機会を『一期一会』で得られたことを大変光栄に思っています」としめくくられました。

森村先生の熱い講演に四百人を超す参加者も、予定の時間を大幅に超過したのも忘れるほど熱心に耳を傾けていました。

雑誌や新聞の連載小説を彩る「挿画（さしえ）」、それは単なる飾り絵ではなく、作家と画家、プロ同士のきびしい共同作業です。風間完画伯は、「昭和史発掘」や「天保図録」など数多くの清張作品を彩ってきました。プロとしてのハートを大切にする、名コンビの二人。今回の企画展では、「昭和史発掘」の挿画、映像「点と線」の原画を中心に、清張と画家・風間氏の心通う仕事を紹介しました。

なお次回の企画展では、朝日新聞社時代の清張にスポットをあて、当時の清張を知る同僚の新証言などから、新たな清張像に迫ります。

三、文芸映像「点と線」

昭和三十二年連載の「点と線」の背景にある「時代」を忠実に再現しようとした、その構想から映像化にいたるまでを紹介。

――〈展示品〉映像「点と線」原画、制作資料

四、風間完が描いた清張作品

「天保図録」、「霧の会議」など、風間氏が挿画を手がけた清張作品の世界を紹介。

――〈展示品〉掲載誌・紙（「天保図録」「二冊の同じ本」「網」「霧の会議」「或る『小倉日記』伝」など）

第3回 松本清張研究奨励事業 研究奨励金贈呈式

平成十年度、清張研究の促進を目的に創設した「松本清張研究奨励事業」も第三回を数えました。全国から研究企画を公募し、入選者に二百万円を上限とする奨励金を支給、一年後に研究成果を報告してもらう事業です。今回は、ジャンルを越え幅広い活躍をした松本清張にふさわしく、文学、現代史、古代史研究、調査・執筆など多彩な分野から十七点の応募がありました。入選の二点は下のとおりですが、選にもれた企画の中には、青少年向けの松本清張の伝記を編集・刊行するという、小中学校の先生たちのグループの応募などもあり、研究のすそ野の広がりが見られました。

右から、
吉良芳恵、大西比呂志、南富鎮、当館館長

「日本文学と朝鮮関連分野」

南　富鎮　日本学術振興会 外国人特別研究員

●審査講評より（平岡敏夫選考委員会委員長）

「本研究は、松本清張の戦争と衛生兵としての朝鮮体験の調査・研究を中心とする。松本清張の作品には韓国・朝鮮を扱った作品が多く、古代史、現代推理、時代物、社会小説など、松本清張の仕事のほとんどのジャンルとテーマにわたって韓国・朝鮮が関連している事実に着目、その根源に松本清張の戦争体験・朝鮮体験があることに思い到り、衛生兵として勤務した朝鮮の各地を調査、当時の日本軍の駐屯状況と共に、松本清張の朝鮮体験・戦争体験の実態を明らかにしようとしている。南氏の研究企画は綿密かつ周到であり、清張作品を丹念に読み進め、従来の研究・調査が及ばず、しかも松本清張研究として不可避の領域に迫るものとして、選考委員会できわめて高く評価された」

「映像からみる戦後史資料の発掘と調査研究」

吉良　芳恵　日本女子大学文学部 史学科助教授

大西　比呂志　早稲田大学社会科学部 非常勤講師

●審査講評より（平岡敏夫選考委員会委員長）

「本研究は、『日本の黒い霧』において松本清張が取り組んだ戦後日本の数々の事件を、アメリカや日本に残されている貴重な映像の調査を通して明らかにし、松本清張の仕事をさらに深め、評価しようとする。これはきわめて困難な調査・研究であるが、記憶も資料も風化しつつある今日、やはり不可避の領域と言わねばならない」

松本清張記念館 開館3周年記念事業

開館3周年記念祝賀会

八月四日、松本清張記念館にて開館三周年記念祝賀会が行われました。この祝賀会は、北九州松本清張研究会、建築業協会賞（BCS賞）受賞企業グループ、松本清張記念館友の会の各団体が実行委員会を組織し、実施したもので、関係者約八十名の方にご参加をいただき、盛大な祝宴となりました。

当館は、毎年優れた建築物に贈られる建築業協会賞（BCS賞）を、昨年七月に受賞しており、BCS賞受賞企業グループを代表して、（株）宮本建築設計事務所所長・宮本忠長氏にご挨拶をいただきました。

今回、改めて宮本氏にインタビューをお願いし、記念館がBCS賞を受賞した経緯などについてお話を伺いました。

祝賀会の模様

インタビュー

宮本　忠長

プロフィール■

1927年長野県須坂市生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業後、1951年、佐藤武夫設計事務所（早大教授・建築家）に入所。14年間の修行の後、1964年、郷里の家業を継ぎ、（株）宮本忠長建築設計事務所と改組。代表取締役所長として現在に至る。（社）日本建築士会連合会副会長。

主要作品として、当館の他に、長野市立博物館、北斎館、おぼろ月夜の館・斑山文庫、信州高遠美術館、森鷗外記念館など。

―松本清張記念館は第四十一回建築業協会賞（BCS賞）を受賞した訳ですが、審査選考の中での記念館の評価はどのようなものでしたか。

個人名を冠した公設公営の文学館がBCS賞を受賞したことはいままでなかったのではないでしょうか。BCS賞は昭和三十四年（一九五九年）に出来上がった賞で、昨年、四十一回目を迎えました。四十一回で計六四一件の建築物が受賞となり、中でも美術館や博物館は結構ありますが、個人名の付いた公設公営の文学館は今回が最初ではないかと言われています。

私はBCS賞の審査員を今年から担当していますが、この賞のレベルは非常に高いと感じています。国内の建物に限るという条件で毎年一二〇～一三〇件の応募があり、その中から選ぶので非常に激戦となります。

審査員は合計で十二名おります。構成が偏らないように、設計事務所の設計担当者、大学などの研究機関の設計担当者、施工会社の設計トップの三者の組み合わせで、各界四名ずつの計十二名です。

松本清張記念館が受賞した年（平成十二年）は、応募が一〇三件もあり、第一次・第二次審査を行い四十四件がまず残りました。これは後から当時の審査員に聞いた話ですが、記念館は一次・二次審査ともにいい票をもらっており、最上位グループで残っていたそうです。その中から最終的には十八件が選ばれた訳です。例年、大きな建物がBCS賞を受賞することが多いのですが、個人の文学館で、規模もさほど大きくないにもかかわらず入賞していることからも、記念館が非常に高く評価されていたことが分かります。

具体的には、まず館の企画性が高く評価されています。レイアウトや展示の研究にかなりの時間を費やしていること。設計者とのコミュニケーションが大変うまくいっており、設計者が館を理解するための十分な資料と時間が与えられたこと、設計者と施工業者、監理者の関係も分節がきちんと弁えられた結果、建物にスキがなく、妥協のない厳しい建物となったということでありました。それから、館の管理運営がしっかりしていたことも評価されました。結局、企画と運営の力が賞に結び付いたということでしょう。

実は、一次選考において入選候補となった建物が、松本清張記念館を含めて北九州から三つ出ていました。激戦の中で、記念館が予備投票でも上位に入り、現地審査を経て、堂々と入賞したということで私としても大変よかったと思います。清張先生の偉大な業績を取り扱い、市民に公開していく姿勢が実に正確であったし、戦場であり魂の場でもあった住居の部分と業績を紹介した部分を二か所に分けて展示したことも非常によかったのではないでしょうか。慎ましくもあり芯のしっかりした建物に、やはり最後は清張先生の偉大な人格が加わり、建物への印象を一層増幅させてくれている気がします。

私は、今、審査員になり、昨年の評価を聞いてみて、すぐれた作品とは、すぐれた企画力・技術力の総合だということをしみじみ教えられました。

―宮本様ご自身、記念館の設計・建築に直接携われた訳ですが、今回のBCS賞受賞に対するご感想とこれからの記念館について一言お願いします。

BCS賞という高い評価をいただき、私としてはびっくりもしており嬉しくもあります。ひとえに、関係者との打ち合わせも含めて、設計期間を十分にいただいた結果かとも思っています。

以前、記念館を設計する前に、森鷗外記念館を設計したことがあり、森鷗外記念館を関係者の方々に見学していただいたことがあります。その後に、藤井館長をはじめ打ち合わせをさせていただき、その中で設計に当たってのヒントがいくつか浮かんできた訳です。

私としては、業績を紹介する場所と頭脳の場所―つまり書斎や書庫など、魂の場所でもあり戦いの場所でもあるのですが、そういった場所―はそれぞれ別の空間におくべきだと考えていました。入館して、最初からいきなり頭脳の世界に行くということではなく、手を引かれるように清張先生の足跡をたどって、生い立ちや業績を見た後で、最後に頭脳の世界を訪れる。ひととおり見終わって、「勇気が湧く」「私も負けてはいけない」「人生を大事に生きよう」といった静かな印象を持って余韻を残しながら帰っていく……そういう建物であればいいと私は思っていました。

皆さんに支えられながら取り組んだ結果が賞に結び付いて、実に運がいいという感じがします。清張先生が存命であれば、建物に対してどんな批評を下されるだろうかと思っています。「よかろう」と言ってくださるかどうか。ただ、藤井館長から「いい建物ですよ」とおっしゃっていただきましたし、この賞が何度も貰えるという賞ではないことからも、私自身非常によかったと思っています。

ところで、藤井館長から松本清張記念館友の会の話を伺いましたが、友の会は非常に重要だと思います。私としては、記念館は、拠点として、清張先生を囲んで、研究者や愛好家などさまざまな人が集まる交流の場であって欲しいと常々思っていました。記念館の地下にそうした場所が欲しいと思っていたところ、小林安司先生を中心に、文学運動や人間清張に迫る団体、友の会ができました。私自身、友の会に入会することによって、清張先生についてもう一度知る機会を与えられましたし、記念館も人生の目標や勇気といったものが持てる場所になりつつあるのではないかと思っています。そうしたことについて大変感謝しております。記念館の関係者の方々のご健勝を今後ともお祈りします。

平成十三年九月十一日　聞き手●丸田圭一

展示品紹介

小説研究十六講

〈『小説研究十六講』を買ったのは昭和二、三年のころだったと思う。私の持っているのは十三版で大正十四年十二月発行である。初版がその年の一月だから、一年に十三版を重ねた当時のベストセラーだ。私は高等小学校を出てすぐにある会社の給仕になっていたが、時間を見つけてこれに読み耽った。たとえば銀行にお使いに行きそこで待たされている間もこれを開いた。自転車で使いに走りまわるのに、五百ページの本は少々重くて厄介だったが、これを読むのがそのときのただ一つの愉しみだった。〉

右の文章は、『小説研究十六講』が新装版刊行されるにあたって冒頭に収録された「葉脈探求の人 ―木村毅氏と私 ―」の一部である。少年時代、この本を愛読した清張は、醸成されるが如く半生を過ごして作家となり、同書の新装版の序を飾るに至った。

『小説研究十六講』という書名は手軽な入門書のようにも聞こえるが、その内容は世界の文学を対象に広範囲で説かれ、質の高さに加え幅の広さ、そして著者の明晰さに感嘆させられる。「葉脈探求の人 ―木村毅氏と私 ―」から清張の言を借りよう。

〈明治十八年に出た坪内逍遙の啓蒙的な「小説神髄」から四十年を隔てて、ここにはじめて近代的小説作法と小説鑑賞の理論書を得たのである。その引用には十九世紀末までの東西古今の代表作をえらぶなどして、私には世界文学史の概観を教えられる思いであった。高遠な観念的文学理論も欠かせないが、必要なのは小説作法の技術的展開である。本書にはこれが十分に盛られていた。〉

著者の木村毅は、博覧強記の人だった。

著書を見ても明治・大正文学や比較文学以外にも多彩な仕事ぶりがわかる。清張も愛読した〈円本〉の元祖に当たる『現代日本文学全集』も、改造社に木村が考案し持ち込んだ企画である。また当時、外国文学の紹介者として活躍していた木村はE・A・ポーの先駆的研究者としても知られているが、ポーは同時に清張が影響をうけた作家でもある。

作家になってからの清張は、上京して間もない頃初めて木村を訪ねた。そのときの木村は、突然の訪問だったせいかぶっきらぼうだったという。その後、たびたびエッセイなどで木村や著書について言及する清張に、木村が応えるというかたちで、二人の関係は次第に深まっていった。清張が「小説東京帝国大学」を書くにあたっては木村が資料の一部を提供したこともあった。

幼い頃から好奇心が旺盛で博識、学問に対しても実践的でどこか孤独…結局、清張と木村とは同じ性質を持った者同士ではないだろうか。その二人が、世代を越えて邂逅したのである。

（学芸担当　柳原　暁子）

きよしとハルコの 探検！清張記念館

“番外「記念館ホームページ」の巻

ハルコ　ねえ、今度の月曜日に清張記念館に行かない?

きよし　いいよ、その日ならまず展示を見て、2時から「わるいやつら」のビデオ上映を見るだろ、そうすると4時10分 だから…と、新しく推理劇場で始まったアニメ「点と線」の最終にも間に合う。お昼から行くと丁度いいね。

ハルコ　今日はすごく詳しいのね。

きよし　まあ、ちょっとね。ところでさっきから何を見ているの?

ハルコ　記念館のホームページよ。清張の年譜や、展示室の案内まで載っているわよ。

館報のバックナンバーも掲載されています。

ハルコ　企画展やビデオ上映のお知らせもあるから、これで先に情報を仕入れていくといいかも、ねっ。

きよし　はっ! ばれてる……。

記念館に隣接の小倉城、小倉城庭園のホームページにもリンクしています。
夜中でも気軽に来館できる、もう一つの記念館、松本清張記念館のホームページは、
http://www.kid.ne.jp/seicho

「清張作品を読んで考えたこと」「わたしを変えたこの一冊」

みんなの広場

「砂の器」ー胸がつぶれる思いがしました。人間の心の弱さ、みにくさを描くという点では他に並ぶ人はいないと思います。（30才代　広島　女）

「けものみち」ー政官財界の癒着構造、「権力の腐敗」を小説に書ける作家は松本清張氏以外には見当たらないでしょう。非常に共感を覚えます。（40才代　兵庫　女）

「ゼロの焦点」ー若い時読み、信じていた夫のまるで違う面が次々と暴露されていくところがゾーッとしました。人には誰にも知られたくない謎の面があるが、それが誇張されているところが面白かった。（40才代　佐賀　女）

「昭和史発掘」ー学生時代、僅かなアルバイト料で毎月1巻ずつ購入して読んで、日本の現代史に開眼させられた。私の青春時代の思想形成に最も影響を受けた作品。（50才代　広島　男）

私は高校の頃、「時間の習俗」を読み、それから松本清張の本を図書館に通いながら読みあさりました。私がなぜ先生の作品が好きかと言えば、土のにおいのする、社会の中で一番底辺で暮らしている人達、特に田舎（地方）を取り扱っているからです。（40才代　大分　女）

編集部より

たくさんのご意見をいただきありがとうございました。紙面の都合上、ほんの一部しか紹介できず、誠に申し訳ありません。

ご意見を拝見しますと、作品を通じて皆様の心に深い感銘を今なお与え続ける松本清張の偉大さを改めて思わずにはいられません。深く人間性を探求し続けた姿勢こそが、多くの人々の共感をうみ、清張作品の魅力の根源ともなっているのでしょう。今後とも、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。

このコーナーではアンケートで寄せられた意見をもとに、テーマごとに集約して発表しております。
第6回のテーマは、

「松本清張への思い」

松本清張その人に対する「思い」をお聞かせください。皆様の声をお待ちしております。

アンケートは館内にも置いております。
お答えいただいた方の中から5名様に記念館オリジナルグッズを差し上げます。　「みんなの広場」係まで

北九州文学マップ ― 阿南　哲朗

小倉名物太鼓の祇園
太鼓打ち出せ　元気だせ
ア　ヤッサヤレヤレヤレ

毎年夏になると小倉の町に響く太鼓祇園のはやし言葉は、昭和九年、阿南哲朗が三十一歳のときに作ったものである。

阿南哲朗は明治三十六年大分県竹田市に生まれ、四歳のとき小倉に移住、以後昭和五十四年七十六歳で没するまで小倉を活動の基盤とした。

その活動領域は、詩、民謡、童話の創作活動のほか、到津遊園地での林間学園活動が有名である。

また、火野葦平、劉寒吉、岩下俊作、横山白虹、大隈岩雄などとも交友関係をもった、北九州を代表する文化人であった。

「江南はよく耕作を訪れた。よく気のつく彼は、来るごとに卵や牛肉のようなものを、どこからか、手に入れて持ってきた。」

松本清張の「或る『小倉日記』伝」中、主人公田上耕作のただ一人の友人として登場する「江南鉄雄」は、阿南哲朗がモデルといわれる。

現在、門司区畑の玉泉寺内に静かに詩碑が建っている。

（中野　吉明）

松本清張記念館入館者40万人突破！

平成13年9月30日、松本清張記念館は平成10年8月の開館以来40万人目の入館者をお迎えしました。開館してから3年余り、文学館としては異例の早さで達成しました。

40万人目の入館者は、福岡県八女郡広川町にお住まいの田中キヨ子さん（69）。「作品はテレビドラマで知っていますが、入館は初めてです。びっくりしました。これから清張のことをいろいろ勉強させていただきます。」とのことでした。

記念館では、この記念事業として、9月30日から10月2日までの3日間、記念館ミュージアムグッズの抽選会を、10月6、7の両日には記念館オリジナル映像「点と線」の無料上映を行いました。

丸田副館長と記念撮影

•お知らせ•

第4回 松本清張研究奨励事業募集

松本清張記念館では、松本清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の真相を追及する松本清張の精神を継承していくため、松本ナヲ夫人のご厚意により松本清張研究奨励制度を創設しております。現在、第4回松本清張研究奨励事業の研究企画を募集中です。詳しくは松本清張記念館までお問い合わせください。

募集要項

対　　象	①松本清張の作品や人物像を研究する活動 ②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等） ※①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
内　　容	入選者（団体）に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。
応募方法	今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など（様式は自由、ただし日本語）を、平成14年3月31日までに応募してください。
選　　考	松本清張記念館内の選考委員会により選考します。
発　　表	審査終了後、審査結果を直接通知します（6月頃）。なお、採用された企画は翌年の6月末日までに実施成果を報告していただきます。

松本清張没後10周年事業について

平成14年8月4日は松本清張氏の没後10周年に当たります。記念館では、没後10周年事業として様々な企画を現在計画中です。内容につきましては、改めて館報でお知らせします。

映画上映

（11月スケジュール）

記念館では、毎月、松本清張原作映画のビデオ上映を行っております。11月の上映内容は次のとおりです。

「わが道は霧の中」
「わるいやつら」

	11 :00～	14 :00～
11月3日（土）		
4日（日）		
5日（月）		
6日（火）		
7日（水）		
8日（木）		
9日（金）		
12日（月）		
13日（火）		
14日（水）		
15日（木）		
16日（金）		

「わが道は霧の中」（松本清張記念館オリジナル版）

1997年／53分
企画・制作・著作：電通
出演：松本ナヲ、松本陽一、松本公子ほか

「わるいやつら」（松竹）

1980年／129分
監督：野村芳太郎
脚本：井手雅人
出演：片岡孝夫、松坂慶子ほか

松本清張記念館友の会

年次総会開催

平成12年11月に発足した松本清張記念館友の会は、本年8月から平成13年度事業を展開しております。8月4日に年次総会が当館で開催されました。総会出席者は約80名で、遠方からも多数ご参加をいただきました。

総会では、平成12年度事業について決算の承認があり、続いて平成13年度事業内容が決定されました。また、今年度から友の会幹事が新たに設置され、幹事に就任された6名の方の紹介がありました。

友の会では、引き続き様々な事業を実施していきます。皆様の友の会へのご入会・ご参加をお待ちしております。

香椎

記念館オリジナル映像「点と線」

風間 完 × 松本清張

清張作品の挿画を多数手掛けられた風間完画伯の原画を元に、デジタル技術を駆使してアニメ化した、これまでにないユニークな「点と線」が出来上がりました。原作のもつ昭和30年代の雰囲気を忠実に再現し、映像の美しさとともに、推理小説本来の面白さを楽しめる文芸映像です。

現在、記念館内「推理劇場」で上映中です。松本清張記念館でしか観ることができない、まったく新しい「点と線」です。是非ご来館の上、ご鑑賞ください（料金は常設展示観覧料に含まれています）。

映像用原画

資料写真

主なキャスト（声の出演）
鳥飼重太郎刑事：西田敏行（俳優）
三原紀一警部補：緒形直人（俳優）

時間／59分31秒
原画・作画監修／風間　完
監督／桃沢裕幸

〈上映時間〉

10：00～11：00
11：05～12：05
12：10～13：10
13：15～14：15
14：20～15：20
15：25～16：25
16：30～17：30

鳥飼重太郎刑事

三原紀一警部補

東京駅15番ホームに立つ佐山とお時

●編集後記●

館報第7号をお届けします。

本年8月4日をもちまして、松本清張記念館は開館3周年を迎えました。今回は記念事業の模様を中心にお届けしておりますがいかがでしょうか。この3年間で、本当にたくさんの方々にご来館いただき、誠に感謝に堪えません。

今後とも紙面の充実に努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

イラスト：山藤　章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL　093(582)2761
FAX　093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作　(株)エディックス

●開館時間　午前9：30～午後6：00（入館は午後5：30まで）
●休 館 日　年末（12月29日～12月31日）
●観 覧 料　一　般／500円（400円）　中・高生／300円（240円）
　小学生／200円（160円）　（　）は30人以上の団体
●アクセス　J　R：小倉駅から徒歩15分　西小倉駅から徒歩5分
　バス：小倉北警察署前／NHK前下車
　車　：北九州都市高速、大手町ランプより5分